

随想

8月23日、夏の全国高校野球決勝が沖縄尚学と日大三高の間で行われ、沖縄尚学が3―1で勝利し初優勝を果たした。県勢が夏の甲子園で優勝したのは2010年春夏連覇を達成した興南高校以来15年ぶりである。

決勝当日、沖縄の大動脈である国道58号をはじめ県内の各道路は車の影も少なく、交流サイト(SNS)上では「沖縄の都市伝説」として、広く拡散された。学生の頃、車の部品配達店でアルバイトをしていた時の出



高良 守

沖尚優勝 県民を力づける

来事である。車の部品の納品時に、ちょうど沖縄の代表校が甲子園の試合の最中であつた。担当者には部品受領のサインをお願いすると「今、応援で忙しいのが分らんのか? お前はこんな時に配達に来て非常識だな」と叱られたことを思い出す。

県内の大型ショッピングモールや商店街などでは、パブリックビューイングの特設会場が設けられ、節目ごとに指笛や太鼓の音、大声援が響いた。沖縄尚学の優勝が決定するや否や本土や外国にいる友人や知人、親戚から「沖尚優勝おめでとう」のメッセージであふれ返った。

沖縄県は、その歴史的背景や地理的条件などから、日本本土

とは異なる政治体制が敷かれ、戦後27年たつてやっと日本としてスタートを切った。このことは、特に基地問題や経済問題が今でも最重要課題として挙げられる。つまり、27周遅れのスタートだけに、沖縄は全てにおいて不利にならざるを得ない。

そのため、われわれウチナーンチュ、特に私のような年代以上の方々は、本土に対するねたみのようなものが心の奥底にあるのかもしれない。「なぜ、沖縄だけ」。沖縄尚学の甲子園大会の優勝は「優勝、おめでとう」と素直に彼らの功績をたたえるべきである。それは、幼い時から甲子園という大舞台でのプレーを夢見て、地道に精いっぱい

頑張ってきた結果であることは言うまでもない。

子どもたちのこのような素晴らしい活躍は、時として一部のウチナーンチュには違った意味をもたらすのも確かである。それは、強いものに対して何もできなかつた自分や、強いものを打ち負かすという姿勢である。

沖縄尚学の子どもたちが野球で全国の猛者を倒し、3396校の頂点に立ったことで、沖縄が歩んできた苦難の歴史へ一矢報い、沖縄の尊厳や誇り、プライドを示すことができたと思う。一部のウチナーンチュもいるだろう。恥ずかしながらその中の一人に私も入っている。

今、改めて沖縄尚学野球部へ伝えたい「優勝おめでとう。そして、『ありがとう』」。

(豊見城市、沖縄国際大学沖縄経済環境研究所特別研究員、57歳)